

歴史の謎の中で、主の御力と御業を語り継げよ

まず、詩編78編1節から8節を祈りつつ読んでみよう。「わたしの民よ、わたしの教えを聞き、わたしの口の言葉に耳を傾けよ。」とあるように、この歌は親が子や孫たちに、教師が生徒らに教える「教育」の歌である。その教育(共育)の内容は神の救済の物語を語り継ぐことである。わたしたちは、こどもたち、孫たち、あるいは子のない人は隣人たちに何を証しし、語るのであろうか?私自分の父から受け継いだことは「人様に迷惑をかけるな」であった。迷惑をかけないことの大切さ(欲望の自制)と、人は人に迷惑をかけなければ生き得ないこと(支援を求めること)を知ることの両方が重要なのだろう。昨今、旧統一協会(現世界平和統一家庭連合)の奇妙で歪んだ物語(キリスト教と反共と韓民族主義と儒教的道徳?のごちゃまぜ)について聞かされ、日本の政治がその物語にかなり影響を受けていることが取り沙汰されている。歴史はある意味で理解が困難な謎を秘めているが、そのような中で私たちは何をどのように物語るのだろうか。

1. 「わたしの民よ、わたしの教えを聞き、わたしの口の言葉に耳を傾けよ」(1-3節、5-6節)

最初の1-2節は詩編49:2-5節に似ている。「知恵文学」の色彩である。ここで歌い手は「教師」として、神の民に、「私の民よ」(アンミイ)と語り掛ける。子どもたち、孫たち、そして生徒たち、隣人たちは「神の民」であり、「わたしの民」である。他者に対していろいろな社会的葛藤もあろうが、「わたしの民よ」という呼びかけに温かいものを感じる。「わたしの教え」はモーセ5書、「トローラー」のことである。詩人はそれを、親しみを込めて「わたしの」教えであると言い、わたしの「口の言葉」(lə'imrê-pî)であると言う。文字となった「教え」を奉仕者は祈りを込めて、霊を吹き込みながら「自分の口」で発音して語るのである。「暗黙の了解」ではなく、言葉で証言するのである。

教育には一方では人間の内面にある可能性に何かを吹き込む、いや余分なことを吹き込まないというルソーの自然主義的な考え方と、他方、市民教育のように社会的規範を教えたり、あるいは、ユダヤ教的教育のように、「外側」から語ることに「聞き」(ha'azînâh, 耳を与える)、「耳を傾ける」

(hattû'azênêkem) ことが重要なのであるという理解がある。「注入法」というと聞こえが悪いが、少なくとも外側から刺激されて内発的なものが働き出すという二つの考え方がある。この二つの極の間にそれぞれの教育理念が分布しているのだろう。人は外側からインプットされることなしではアウトプットは出来ないのである。

「トローラー」だけではなく、2節では「箴言」(bəmāšāl 「譬え」で語る)に言及され、「いにしえからの言い伝え」(hîdōwt, dark saying, 謎、隠喩?)も加えられている。A. ヴァイザーはこの詩のタイトルを「歴史の謎」としている。マルコ4:11参照。主イエスは譬、謎を語られた。歴史に働く神、神の働く歴史は「謎」として私たちの応答を待っているのだろうか?ここでは、先祖と子孫が比べられており、神の言葉と働きは一貫しているが、それへの応答としての神の民の過去と現在が「比喩」として比べられる。歴史における神の出来事は、わたしたちが「聞いて悟ったこと」であり、また、「先祖がわたしたちに語り伝えたこと」であるという。5節では「主はヤコブの中に「定め」('ēdūt, 証拠。証明、証詞)を与え、イスラエルに教え(トローラー)を置き」と言われ、神は、先祖から現在を生きる世代、そして、子孫への伝統の継承を命じたと言う。このような「伝承」のあり様は、Iコリ

ント 15:3「最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです」というパウロが語る事態の中にも響いていることである。先祖→わたしたち→子孫、後の世代へと語り継がれるのである。

2. 「主への賛美、主の御力、主が成し遂げられた驚くべき御業」(4 節)

伝承の内容は律法、細かい言い伝えというより、そのような応答が引き起こされる神の出来事を中心にしている。それは(イスラエルの解放と結びついた)主なる神(ヤハウェ)の御力、驚くべき御業である。それらは主なる神への賛美(təhillōwt)の形で伝承される。こうして、新約聖書においてだけでなく、命令法(律法)は常に直説法(福音)に基礎づけられている。

3. 伝承の必要性の理由(7 節)

なぜ、救済史の伝承が必要かという、「子らが神に信頼をおき、神の御業を決して忘れず、その戒めを守るために」とであると言う。「神に信頼をおく」は原語的には「彼らの希望を(kislām)神に置くため」、これが第一。第二は、神の御業を忘れないため、そして、第三に、神の諸命令(miswōtāw)を守るためである。この世の価値、栄枯盛衰の中で人は神にこそ希望を置くことができ、疑い、迷いの世の中で救いの御業を思い起こすことができ、生活の指針である神の戒めに従って生きることができる。

4. 先祖の不信仰・不従順と現在への警告(8 節)

詩編の朗読者は「先祖のように/頑な反抗の世代とならないように/心が確かに定まらない世代/神に不忠実な霊の世代とならないように。」と歌い、歴史を学び、先祖らの失敗を反面教師として自らを認識し、悔い改めて歩むように勧める。「その心が定まらなかった」(lo- hēkîn, kun 立っていない、堅く確立していない)。「その精神が神に対して不忠実な(ne'emnāh)、アーメンでなかった先祖たち」。時代の風を読むことは大切ではあるが風に流されて右往左往することもまた問題であろう。ロシア、米国(EU)は戦争・闘争を繰り返して失敗から学ぼうとしていないように見える(ヴェトナム戦争、アフガニスタン、イラク、シリア、そして、ウクライナ戦争等)。日本は大国に追従し、軍拡を目指しているが、この方向は、過去から学ぼうとしていないのではないか。あるいは反省して「勝ち馬に乗ろう」するための米国追従なのか? 9月27日は安倍の国葬とのことである。安倍の反民主的行動と言葉、政治の私物化、お仲間主義の罪悪から岸田政権は何を学ぼうとしているのか。安倍の国葬の閣議決定は安倍によるクーデタとしての集団的自衛権の導入と等しい「ルール違反=憲法違反」の「暴挙」であろう。歴史から学ぼうとしない(逆に、安倍の閣議決定という暴挙から学ぼうとする?)クニはただ滅びるのみである。「人よ、何が善であり/主が何を前にお前に求めておられるかは/お前に告げられている。正義を行い、慈しみを愛し/へりくだって神と共に歩むこと、これである。」(ミカ6:8)

そのような時代の風の中で絶対少数者としての日本の教会は何ができるだろうか? ただ、主日礼拝において、神の救済史を証言することはできる。